

3.7 (当座借越の問題)

あらかじめ、銀行と当座借越契約を結んでおくことにより、預金残高を超えて小切手を振り出すことができます。

預金残高を超えて振り出した分は、「当座借越」という負債の科目で処理します。

ちなみに、「当座借越」は、貸借対照表では「短期借入金 (借入金)」として表示することになります。

他店振出の小切手を受け取った場合、本来は「現金」で処理するのですが、直ちに預け入れたということで、「現金」勘定は通さずに、いきなり「当座預金」で処理することになります。

その際、「当座借越」つまり、借金があったら、先に借金から返す必要があり、「当座借越」を減らして (負債の減少だから借方)、残りは当座預金が増えることになります。

4.6.10 (小口現金の問題)

定額資金前渡制度は、インプレスト・システムともいわれ、あらかじめ、小口現金を扱う担当者に週の初め (あるいは、月初) に定額を前渡しておき、週末 (あるいは月末) に支払額の報告を受け、同額を補給するというものです。

問題そのものは、非常に簡単なので、特に補足は不要かと思われます。

【参考】日商簿記検定用のプラスαの知識

小切手に関しては、日商では、もう少し意地が悪い問題も出題されます。

- 他店振出の小切手を受け取った場合は「現金」、
- 自店 (当店) 振出の小切手を受け取った場合は「当座預金」で処理します。

他店振出小切手はヨシとして、当店振出の小切手を受け取った場合に、なぜ、「現金」ではなく、「当座預金」で処理するか？

理由を考えてみると、小切手を振り出したときに、「貸方：当座預金」で、当座預金を減少させる処理をしていますよね？

しかし、回りまわって自店が振り出しておいた小切手が手元に戻って来たのですから、結局、「当座預金」は減らなかったことになり、元に戻しておくために、「借方：当座預金」で処理する必要があるわけです。

こういう部分が、簿記の面白さの1つでもあると感じます。

そのため、簿記は暗記科目ではなく、数学同様に理屈を考える癖にしないと上級に進んでから、困ることになるのです。

また、「当座借越」についても、1勘定制と2勘定制があり、日商の場合は、1勘定制で処理しなさいという指示がある場合、例え、使用できる勘定科目の中に「当座借越」があっても、引っかけられないように「当座」または「当座預金」で処理しておかないといけません。

3番なら貸方が「当座」(または、当座預金) 860,000 となる訳です。